教科書文庫
4
110
31-1938
2500028387

尋常小學修身書

兒童用

卷五

文部省

40474
教科書文庫
4
110
31-1938
25000
28387

教科書文庫
4
110
31-1938
2500028387

廣島大學
東雲分校
圖書之印

尋常小學修身書

兒童用

卷五

文部省

文部省
圖書檢査濟

登録番号
28387
分類 37593 M

広島大学図書
2500028387

教育ニ關スル勅語

目録

第一　我が國……一
第二　擧國一致……五
第三　國法を重んぜよ……十一
第四　公德……十六
第五　禮儀……二十
第六　衛生……二十三
第七　公益……二十八
第八　勤勞……三十五
第九　儉約……四十一
第十　産業を興せ……四十八
第十一　進取の氣象……五十二
第十二　自信……五十八
第十三　勉學……六十五
第十四　勇氣……七十
第十五　度量……七十三
第十六　朋友……七十八
第十七　信義……八十一
第十八　誠實……八十五
第十九　謝恩……九十一
第二十　博愛……九十五
第二十一　皇太后陛下……百二
第二十二　忠君愛國……百六
第二十三　兄弟……百十二
第二十四　父母……百十六
第二十五　孝行……百二十二
第二十六　德行……百二十六
第二十七　よい日本人……百三十三

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名　御璽

第一　我が國

天皇陛下は、我が大日本帝國をお治めになる御方であらせられ、我等は皆、天皇陛下の臣民であります。

天皇陛下の御先祖は、天照大神にましく、てきはめてたふとい御方であらせられます。大神は、遠い昔に、御孫瓊瓊杵尊をお降しになつて、此の國を治めさせられました。其のとき、大神は、尊に、

「豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。さき

くませ。寶祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし。」

といふ神勅をたまはりました。豐葦原の千五百秋の瑞穗の國とは、我が大日本帝國のことで、寶祚とは、皇位即ち天皇の御位のことであります。大日本帝國は、天照大神の御子孫がお治めになり、皇位が天地と共に窮りなくお榮えになることは、此の神勅にお示しになつた通りであります。

瓊瓊杵尊の御曾孫は、神武天皇であらせられます。天皇以來、御子孫が引續いて皇位におつきになつて、永遠

に我が國をお治めになります。神武天皇が御即位の禮をおあげになつた年から、今年までおよそ二千六百年になります。此の間、我が國は、皇室を中心として、全國が一つの大きな家族のやうになつて榮えて來ました。御代々の天皇は、臣民を子のやうにお

いつくしみになり、臣民は、祖先以來、天皇を親のやうにしたひ奉り、心をあはせて、忠君愛國の道につくしました。

世界に國はたくさんありますが、我が大日本帝國のやうに、萬世一系の天皇をいたゞき、皇室と臣民とが一體になつてゐる國は、外にはありません。

我等は、かやうなありがたい國に生まれ、かやうな尊い皇室をいたゞいてゐて、又かやうな美風をのこした臣民の子孫でありますから、あつぱれよい日本人となつて、皇運を扶翼し奉り、我が國を益盛にしなければなりません。

第二　擧國一致

我が國は、皇室の御祖先のおはじめになつた國であります。

國民は、祖先以來、皇運を扶翼し奉つて、此のりつぱな國をまもつて來ました。

國に大事が起つた場合には、皆心を一にして、一身一家をかへりみず、忠君愛國の道につくしました。

我が國が、世界で最も舊い國であつて、一度も外國に國威を傷つけられたことがなく、年と共に益榮えて行くのは、皇室の御威光のお盛であらせられるためであるのは申すまでもありませんが、

又國民に、擧國一致の精神が強いためであります。

昔、元（げん）といふ日本の幾倍（いくばい）もある大國が、あたりの國に勝ちほこつた勢で、我が國に押寄せて來たことがありましたが、我が將士は、勇ましく戰つて、遂に其の大兵を追拂ひました。

其の時のことです、九州の海岸を守つて奮戰（ふんせん）した武士に、河野通有（かうのみちあり）といふ人がありました。始め鄕里を出る時、敵がもし十年のうちに攻寄せて來なかつたら、こちらから彼の地に押渡つて合戰しようとちかひを立てました。又井芹秀重（ゐせりひでしげ）といふ武士は、其の頃八十五歳の

老人で、歩行も出來ないくらゐでしたから、當年六十五歳になる其の子に、一族の者數名と從者（じゆうしやじやうば）乘馬をつけて、敵國に渡らせたいと願ひ出ました。又かよわい女で、自分が出征出來ないため、力とたのむ其の子と聟（むこ）とに從者乘馬をつけて、夜を日についで馳向（はせむ）かはせようと申し出た者もありました。

國中の武士が、かやうに一致して大敵に當りましたので、二度目に元の大兵が攻寄せて來た時も、見事に打退けてしまひました。戰つて負けたことのなかつた元の兵も、日本の兵にはどうしても勝てず、それからは、ま

た押寄せて來ることを思ひとゞまりました。

明治三十七八年戰役は、我が國が、國の安全と東洋の平和とのためにロシヤと戰つて、國威を世界にかゞやかした大戰爭であります。　明治三十七年二月十日に明治天皇が宣戰の詔をお下しになると、國民は、皆一すぢに大御心を奉體して、國のためにつくさうとかたく決心しました。

出征軍人の意氣はすこぶる盛で、忠勇の美談は數へきれない程ありました。　病を押し、傷をかくして召集に應じた在鄕軍人もあり、血書して從軍を願ひ出た者もありました。　戰地では、雨あられと飛來る彈丸の中で、落着き拂つて自分の務をつくす者もあれば、敵彈のために負傷しても、內地へ送りかへされることをこばんで、また戰線に立つた者もありました。　或は兄弟三人まで出征して各地で勇ましく戰ひ、遂に皆戰死をとげた者などもありました。

戰場に出ない國民も、皆一致して、忠君愛國の誠をつくしました。　働盛りの壯丁が出征した後は、老人も、婦人も、少年も、皆一生けんめいに家業につとめ、儉約を守つたので、全國の貯金の高は、かへつて戰前よりも增しま

尋修五
尋修五

した。戰費のために、稅は平時よりも大そう多くなりましたが、國民は喜んでこれを負擔して、納稅を怠る者などはありませんでした。

軍人が出征する時には、各地の人々は、眞心をこめて送りました。戰地へは慰問袋や手紙を送り、軍人の家族・遺族にはいろ〳〵と行屆いた世話をしました。出征者の妻は、心を引きしめて、家事をとゝのへ、子供をそだてて、戰地の夫に心配をかけないやうにしました。又繃帶を造つて負傷者に送り、或は進んで篤志看護婦となつて親切に傷病者の世話をした婦人も少くありま

せんでした。

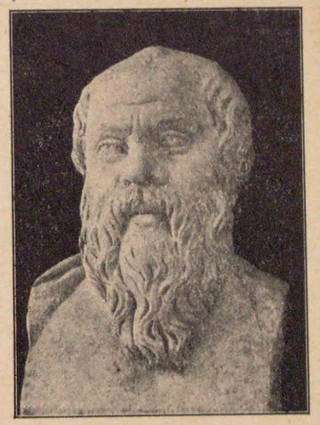
昭和十二年に支那事變が起ると、國民は心を一にして公に奉じ、忠誠の美談はあげつくせない程であります。

明治天皇御製

國を思ふ道に二つはなかりけり
軍のにはに立つも立たぬも

第三　國法を重んぜよ

昔、ギリシヤに、ソクラテスといふ賢人がありました。ソクラテスは、若い時から、國を愛する心が深く、三度も



戰爭に出て、國のために勇ましく戰ひました。中年以後は、世人の迷をとき、正しい道をさとらせようとして、毎日町に出て人々と語り合ひました。彼の眞心のこもつた道理のある話に、皆引きつけられて、次第に其の教に耳をかたむける者が多くなりました。殊に、青年は、彼の說に心服してしまひました。

ソクラテスのひやうばんが高くなるにつれて、ソクラテスに言ひこめられた人々やソクラテスを誤解して

尋修五
尋修五

ゐる人々は、彼をにくむやうになりました。さうして、これらの人々は、しまひには、ソクラテスを罪におとしいれようとして、

「ソクラテスは、ギリシヤの青年を惑はす者である。」

と言つて、彼をうつたへました。ソクラテスは、法廷で、自分の正しいことを堂々と辯

明しましたが、陪審の人々の投票によつてソクラテスに罪があることにきまり、どう〳〵彼に死刑が言渡されました。

ソクラテスを信ずる人々は、どうかして彼を助けたいと思ひました。ソクラテスの親しい弟子に、クリトンといふ人がありました。彼を助ける方法をいろ〳〵考へた末、或日牢屋へ行つて、彼に面會して、

「あなたは、罪もないのに、死なければならないわけはありません。今、こゝを逃出す方法がありますから、すぐにお逃げなさい。」

と言つて、しきりにすゝめました。しかし、ソクラテスは、クリトンの熱心なすゝめに從はうとしませんでした。かへつて、いつものやうにおだやかに、

「クリトン、お前の親切はありがたい。しかし、お前もよく知つてゐる通り、私は、今日まで正しい道をふみ行ひ、人にもさうするやうにすゝめて來たのである。それを今、自分の命がをしいからと言つて、一たん國法の命じたことにそむくやうなことがどうして出來よう。國民たる者がそんな不正なことをするやうでは、國は立つて行くものではない。私も、私の父

母や祖先も、皆國恩を受けて一人前の人間になつた。國あつての私たちです。國法の命ずることなら、どんなことでもそれに從ふべきである。私は我が國を愛し、死を決して三度も出征をした。それ程愛する我が國の、神聖な國法をふみにじつて、今さらどこへ逃げて行く氣になれよう。クリトンよ、私たちは國法を守らなければならない。」

と說ききかせて、落着いてゐました。

第四　公德

公園の樹木を折りとつたり、塀や壁に落書をしたり、人ごみの中で人を押しのけて進んだりするのは、公德心にかけた行です。公園の樹木を折る人も、隣の庭の花はとらないでせう。又どんな人ごみの中でも、知合の人を押しのけるやうなことはしないでせう。知合つてゐる間では決してしないことでも、見ず知らずの人の間となると平氣でするのは、つまり自分が公衆と一體の生活をしてゐるといふ考がなく、かやうなことをしては恥づかしいと感じないからです。

私たちは、自らつゝしんで、知つてゐる人に對しても、又

知らない人に對しても、決して迷惑をかけるやうなことをせず、常に公衆の一人として、何事をするにも公衆のためを考へて、世の中の幸福を進めるやうに心掛けなければなりません。

乃木大將が學習院長であつた時、大將は、常に生徒に、少しでも人の迷惑になるやうなことをしてはならないと言ひきかせました。さうして、自分も決して人の迷惑になるやうなことはしませんでした。

或日、大將は、電車に乘つて上野へ行きました。ちやうど雨降で、大將の着てゐた外套は雨にぬれてゐました

ので、車内で人から席をゆづられても、たゞていねいにお禮を言ふだけで、腰を掛けようとはしませんでした。

大將についてゐた人が、外套を持ちませうかと言ひましたが、それもことわつて、ずつと上野まで立つたまゝで行きました。

人々が互に公德を重んずれば、世の中の秩序はとゝのひ、みんな樂しく生活することが出來ます。世の中が開けて、汽車・汽船・電車・自動車・飛行機等の乘物の便がよくなり、圖書館・博物館等が各地に設けられ、公園も諸所に作られて來ますと、これらの公共の物を利用する場

合が多くなりますから、私たちは一そう注意して、公德を守らなければなりません。

第五　禮儀

世の中は禮儀で立つて行くものです。人に對しては、恭敬の念を失はず、禮儀を正しくしなければなりません。禮儀が正しくないと、人には不快の念を起させ、自分は品位をおとすことになります。

細井平洲は、若い時から、禮儀を正しくすることにつとめた人でありましたが、年をとるにつれて、人品はいよ

いよそなはり、一度平洲にあつた者は、時がたつても、其の上品な樣子が目にうつつてゐて忘れられなかつたといふことです。

我が國では、昔から禮儀作法が重んぜられ、外國の人から、日本は禮儀の正しい國だと言はれて來ました。時勢はかはつても、禮儀作法の大切なことにかはりはありません。私たちは一そう注意して、大國民としての品位をおとさないやうに心掛けませう。

人の前に出る時は、頭髮や手足を清潔にし、着物の着方などにも氣をつけて、身なりをとゝのへなければ失禮

になります。

人と食事をする時は、みんなで樂しく飲食するやうに心掛け、食器の類を荒々しく取扱つたり、さわがしく物音を立てたりしないやうにしませう。又、室の出はいりには、よく落着いて、人の妨にならないやうにし、戸障子の開閉なども、靜かにしませう。

汽車・汽船・電車・自動車等に乘つた時には、人に迷惑をかけないやうにすることはもとより、不行儀なふるまひをしたり、卑しい言葉づかひをしたりしてはなりません。殊に集會の際には、此の心得を忘れてはなりませ

ん。又、人の顔かたちや身なりなどをあざ笑つたり、どやかく言つたりするのも、かたくつゝしむべきことであります。

外國の人に對して、禮儀に氣をつけ、親切にすることは、文明國人たる者の心掛くべきことであります。

第六　衛生

流行性感冒のために、組の者が半數以上も、一時に學校を休むやうなことがあります。又互に手を取合つて仲よく遊んでゐた友達が、はしかにかゝつてかはるが

はる寢つくやうなこともあります。　これは病氣が次次とうつるからで、かやうな病氣を傳染病といひます。傳染病が學校中にひろまると、おけいこが出來なくなります。　工場にひろまると、仕事も休まなければなりません。　そんなに恐しい傳染病の流行も、多くは、人々の衛生についての注意が行屆かないところから起るものです。　傳染病については、政府も取締をしてゐますが、人々が公衆のためを思つて、自分々々でよく衛生に注意し、又互に心をあはせて公衆の衛生に力をつくさなくては、其の流行を防ぐことは出來ません。

傳染病には、コレラ・チフス・赤痢などのやうに急性のものがあり、結核やトラホームなどのやうに慢性のものがあります。　傳染病の外に、寄生蟲病といつて、寄生蟲が體内に宿つて起る病氣もあります。　いづれも、病毒が外から體内にはいつて、病氣を起すものです。　或は飲食物と一しよにはいり、或は呼吸につれてはいり、又は不潔な物にふれた時にはいるのです。

傳染病にかゝらないやうにするには、これまで學んだ健康の心得をよく守つて、常に身體を強壯にしておくことが第一です。　傳染病の流行する時は、特に飲食物

に注意し、睡眠を十分にとり、よい空氣を吸ひ、日光に浴し、身體・衣服・住居などを清潔にすることにつとめなければなりません。

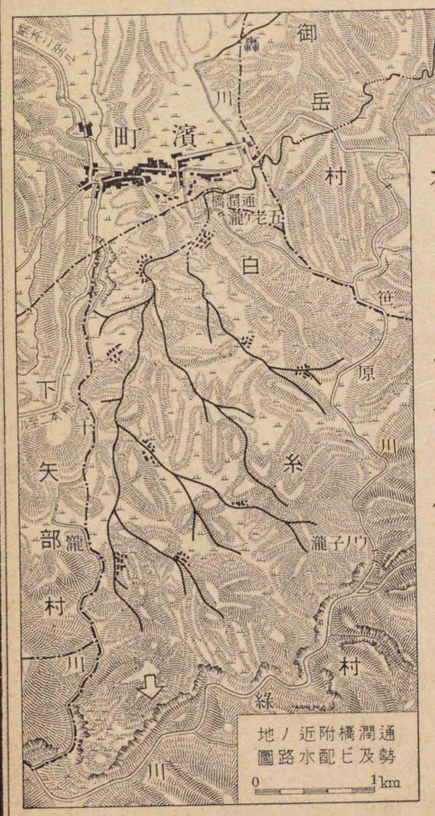
傳染病に對しては、一家の人がめい〳〵自分で氣をつけるばかりでなく、隣近所や市町村の人々が、皆心をあはせ、協同してこれを防がなければなりません。醫師や衛生係の注意を守り、飲料水や下水のことなどに氣をつけ、大掃除や消毒を十分にすることが大切です。

萬一、傳染病にかゝつた時は、すぐに醫師の治療を受け、他人にうつさないやうに、十分に氣をつけなければなりません。隱して屆出をしなかつたり、迷信から醫師の治療を受けなかつたり、又全快しないうちに人中へ出たりしてはなりません。

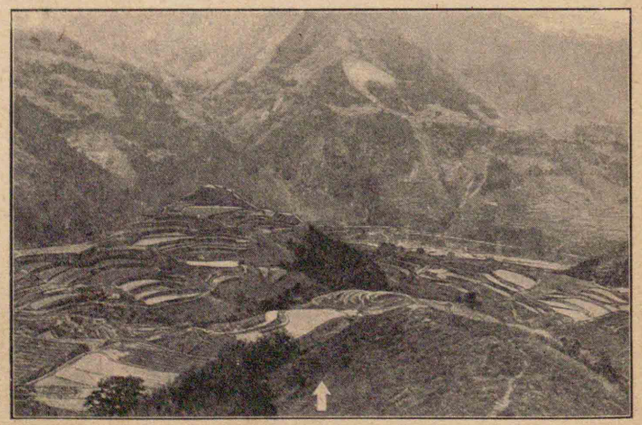
衛生に關する注意が足りないところから、傳染病にかかることがあると、それは自分の禍であるばかりでなく、公衆に大そう迷惑をかけます。まして、自分の不注意から、病毒を他人にうつして大ぜいの人の健康をそこなひ、命をもうばひ、ために市町村の繁榮を妨げ、ひいては國力をも衰へさせるやうなことになつては、其の罪は決して輕くはありません。

第七　公益

熊本の町から東南十數里、緑川の流に沿うて白糸村といふ農村があります。一帶の高地で、緑川の水は、此の村よりもずつと低い所を流れてゐますし、又緑川に注ぐ二つの支流も、此の村のまはりの深いがけ下を流れてゐます。



白糸村は、かやうに川にとり圍まれてゐながら、しかも川から水が引けないので、昔は水田が開けないのはいふまでもなく、畠の作物もよく出來ず、場所によつては飲水にも困る程でした。村人たちは、毎年、よその村々の田が緑の波を打つのを眺めるにつけ、又それがゆたかに實のつて黄金色になつて行くのを見るにつけ、どんなにうらやましく思つたことでせう。さう



して、村のまはりを、朝も晩も勢よく流れてやまない水の音を、どんなにうらめしく聞いたことでせう。

今からおよそ百年程前、矢部郷と呼ばれた此の地方の總莊屋に、布田保之助といふ人がありました。保之助は、矢部郷の村々のために、道路を開き、橋をかけて交通を便にし、堰を設けて水利をはかり、大いに力をつくしましたが、同じ矢部郷の中である白糸村の水利だけはどうすることも出來ず、村人たちと共に水のとぼしいことをたゞ歎くばかりでした。

保之助は、思案の末、緑川の一つの支流の深い谷をへだ

尋修五

てた向かふの村が、白糸村よりも高く、水も十分にあるので、其の水をどうかして谷を越えて白糸村へ渡すより外に方法はないと考へました。しかし、小さいかけひの水ならばともかく、田畑をうるほす程の多量の水を渡すことは、容易なことではありません。保之助は、先づ木で水道を作つて水を渡してみましたが、はげしい水の力で、水道は一たまりもなく吹破られ、木片は深い谷底へばら〳〵になつて落ちてしまひました。

しかし、そんなことで志をくじくやうな保之助ではありませんでした。保之助は、今度は石で水道を作らう

尋修五

と思つて、いろ〳〵の實驗をしてみました。水道にする石の大きさや水道の勾配を考へ、水の力のかゝり方や吹上げ方などをくはしく調べました。とりわけ石のつぎ目から一滴も水をもらさない工夫には、最も苦心をしました。さうして、これならばといふ見込がついたので、先づ谷に高い石橋をかけ、其の上に石の水道を設ける計畫を立てて、藩に願ひ出ました。いよ〳〵藩の許を得たので、一年八箇月を費して、大きなめがね橋をかけました。高さが十一間餘り、幅が三間半、全長四十間。さうして此の橋の上には三すぢの

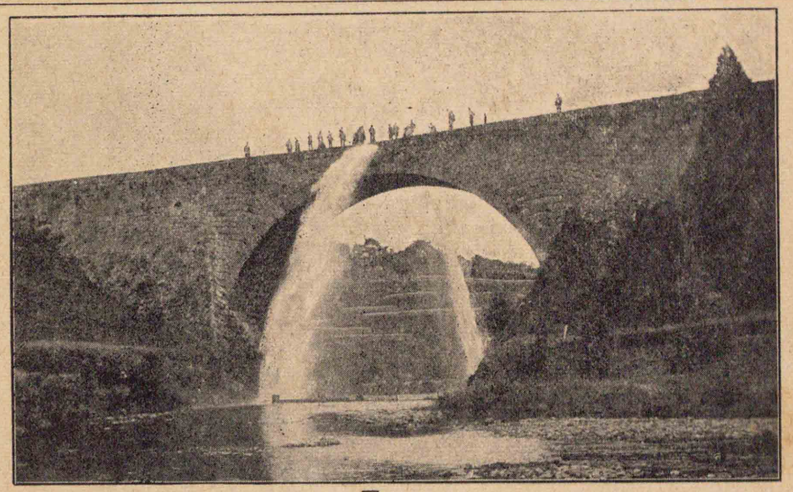
尋修五

尋修五

石の水道が仕掛けられてありました。

始めて水を通すといふ日、保之助は禮服を着け、短刀を懷にして其の式に臨みました。萬一此の工事が失敗であつたら、其の場を去らず腹かき切つて死ぬ覺悟でした。工事の見屆けに來た藩の役人も、集つた村人たちも、他村からの見物人も、保之助の樣子を見て、はつと襟を正しました。

足場が取拂はれました。しかし石橋はびくともしませんでした。やがて水門が開かれました。水は勢込んで長い石の水道を流れて來ましたが、石橋は其の水



勢にたへて、相變らず谷の上に、高く、どつしりとかゝつてゐました。　さうして水は望み通りにこちらの村へ流れ込んで來ました。

「わあ」と喜の聲があがりました。保之助は、今こそ、長い間苦心を重ねた難工事が出來上つたのだと、涙を流して喜びました。さうして、水門をほとばしり出

る水を手にくんで、押しいたゞいて飲みました。

間もなく、此の村に百町歩程の水田が開けました。　さうして人はふえ、村は富み、藩も大いに收益を增しました。　それからは、保之助が村を通ると聞くと、家の中に居る者まで走り出て、ていねいにあいさつをしたといふことです。　橋の名は通潤橋と名づけられ、今もなほ深い谷間に虹のやうな姿を横たへ、一村の生命をさゝへる柱となつてゐます。

第八　勤勞

伊豫の筒井村の農家に、作兵衛といふ人がありました。祖先の代からの借金がたくさんあつたので、其の日其の日のくらしもなか〳〵難儀でした。作兵衛は少年の頃から、何とかして借金を返し、家を盛にしたいと思つて、一生けんめいに働きました。

作兵衛は、毎日、父と一しよに田畑を耕しました。又、夜はおそくまでわらぢを作り、それをのき下につるしておいて、ゆきゝの人に賣りました。其のわらぢの丈夫なのと、はき工合のよいのがひやうばんになつて、いつも、すぐに賣切れました。作兵衛がかやうに夜晝一心

に働くので、村の人たちは、皆、作兵衛を若い者の手本だと言つてほめました。

其のうちに家のくらしも次第に樂になり、長い間心をいためた借金も、殘らず返すことが出來ました。其の時の親子の喜はたとへやうもありませんでした。

それから、作兵衛は、村内の荒地を買求めました。もとより人が耕さない程の荒地のことですから、開くのに手のかゝることは非常なものでした。それを、仕事のひま〳〵に、骨身ををしまず耕して、どう〳〵作物が出來るまでにしました。少しの田地も持たなかつた作

兵衛は、これで、わづかながらも田地持となつたのですから、其の喜は大したものでした。　それにつけても、此の田地を全くの作り取りにすることは、氣がすみませんでした。　そこで、田地調のあつた時に、自分の持高として入れてもらふやうに、役人に願ひ出ました。

役人は、しきりに相談してゐましたが、作兵衛に向かつて、

役「よい心掛ぢや。　しかし、あの田地はまだお前の持高には入れられない。」

作「それは又、なぜでございませうか。」

役「聞けば、其の田地は非常な下田で、いくらもみいりがないさうだ。　外に良い田地を持つてゐる者ならよいが、それだけでは、さしあたつて、租税を納めるにも困るであらう。　まあ、せいぜい手入をして、四年なり、五年なり、作つてみてから願つたがよい。」

作「ありがたいお言葉でございますが、みいりの多い少いは、手入次第でございます。十分手入をすれば、決して租税に困るやうなことはないつもりです。此の村には、まだ荒地がたくさんあります。それを荒れたまゝでおくのは、まだ〳〵農家の働が足りないからだと思ひます。荒地ばかりではありません、下田でも、下田々々と言つて手を入れないから、いつまでたつても上田とならないのです。私は汗とあぶらで、きつと上田に仕上げますから、どうか、持高に入れて、租税を取立てていたゞきたうございます。」

役人も作兵衛のよい心掛に感心して、どう〳〵其の願をきゝ入れました。

其の後、作兵衛は毎朝早く起きて野に出て働き、どうとう其の田地を上田に仕上げました。なほ次第に多くの田畑を開いて、遂にりつぱな一人立の農家になりました。

第九　儉約

上杉鷹山は、十歳の時に、秋月家から上杉家へ養子に來ました。十四歳の時から、細井平洲を先生として學問

にはげみました。十七歳の時、米澤藩主となり、よい政治をしてひやうばんの高かつた人であります。

鷹山が藩主になつた頃は、上杉家には借財が多く、其の上、領内には凶作が續いて、領民も大そう難儀をしてゐました。鷹山は、此のまゝにしておいては家の亡びるのを待つより外はないと考へて、儉約によつて家を立て直し、領民の難儀をすくはうとか

たく決心しました。

鷹山は、先づ江戸にゐる藩士を集めて、

「此のまゝ當家の亡びるのを待つてゐて、人々に難儀をかけるのは、まことに殘念である。これ程衰へた家は立て直す見込がないと誰も申すが、しかし此のまゝ亡びるのを待つよりも、心をあはせて儉約をしたら、或は立ち行くやうになるかも知れない。將來のために、今日の難儀は忍ばなければならない。志を一にして、みんな一生けんめいに儉約を實行しよう。」

と言ひきかせました。しかし、藩士の中には、鷹山に從はないで、

「殿様は小藩におそだちになつたから、大藩の振合を御存じない。」

などと惡口を言ふ者もあり、又、

「皆の喜ばないことは、おやめになつた方がよろしうございませう。」

といさめる者もありました。

しかし、鷹山は少しも志を動かさず、藩士たちに儉約の大切なことをよく説ききかせました。なほ平洲に教

を受けますと、平洲は、

「勇氣をはげまして志を決行なさいませ。」

と言ひましたので、鷹山は益志をかたくして、領内に儉約の命令を出しました。さうして、先づ自分のくらしむきをずつとつゞめて、大名でありながら、食事は一汁一菜、着物は木綿物ときめて、實行の手本を示しました。

鷹山は、或日平洲に向かつて、

「先生、私は人々と難儀を共にしようと思つて儉約をしてゐます。しかし、衣服も、上に木綿の物を着て下に絹・紬をかさねてゐては、ほんたうの儉約になりま

せんから、下着も皆木綿の物を用ひて居ります。」と申しました。

かやうに鷹山は誠實に儉約を守つてゐましたが、りつぱな大名が、まさか、上衣はもちろん下着までも木綿を用ひようとは、側役の人たちの外、誰も信じませんでした。

或日、鷹山の側役の者の父が在方へ行つて、知合の人の家にとまつたことがありました。其の人がふろにはいらうとして着物をぬいだ時、粗末な木綿の襦袢だけは、ていねいに屏風にかけて置きました。主人はふしぎに思つて、

「どうして襦袢だけそんなに大事になさいますか。」

と尋ねますと、客は、

「此の襦袢は、殿様がお召しになつてゐたものをいただいたのですから。」

と答へました。主人は、それを聞いて、大そう藩主の儉約に感じ入り、其の襦袢を家内の人たちにも見せて、儉約をするやうにいましめました。それから、藩士はもちろん、領内の人々が此の話を傳へ聞いて、鷹山の儉約の普通でないことを知り、互につゝしみ、よく儉約を守

るやうになつたので、しまひには、上杉家も領内一般もゆたかになりました。

第十　産業を興せ

鷹山は、領民の難儀をすくふため、儉約をすゝめた上に、なほ産業を興して領内を富まさうとはかりました。荒地を開いて農業をいとなまうとする者には、農具の費用や種籾などを與へ、三年の間の租税を免じました。鷹山は、自ら荒地を開く所を見てまはり、或は村々に入つて、耕作の有様を見て人々の苦勞をなぐさめました。

時には、老婆の稲刈にいそがしいのを見て、其の運搬を手傳つてやつたこともありました。又命令を出して、村々に馬を飼はせたり、馬の市場を開かせたりなどして、農業を盛にする助としました。

鷹山は、又養蠶をすゝめました。領内には、まづしくて桑を植ゑることの出來ない者も多くありましたが、藩には貸與へる金がないので、鷹山は役人を呼んで、

「物事は、急に成しとげようと思つてはならない。小を積んで大を成し、ながく續くやうにすることが大切である。自分の衣食の費用は出來るだけきりつ

めてあるが、なほしんばうして、毎年五六十兩づつ出さう。　それを養蠶奬勵の費用にあてて、十年二十年とたつたならば、どれ程か結果があらはれよう。　自分が儉約して養蠶をすゝめると聞いたなら、財産のある者は、進んで土地を開き、桑を植ゑて蠶を飼はうとする考を起すであらう。」

と言ひました。　役人は、大いに感じ入つて、養蠶役場を設け、鷹山の衣食の費用の中から年々五十兩づつ出して、其の金で桑の苗木を買上げて分けてやり、又は桑畑を開く費用として貸付けてやつて、其の業をはげまし

ました。

なほ鷹山は、奥向で蠶を飼はせ、其の絲で絹や紬を織らせました。　又領内の女子に職業を授けるために、越後から機織の上手な者をやとひ入れて、其の方法を教へさせました。　これが名高い米澤織の始であります。

鷹山はかやうに心を産業に用ひましたから、領内は次第に富み、養蠶と機織とは盛に其の地方に行はれ、米澤織は、全國に名高い産物の一つとなりました。

なせばなるなさねばならぬ何事も
　ならぬは人のなさぬなりけり

第十一　進取の氣象

伊藤小左衛門は伊勢の室山村の人で、味噌・醤油の製造を業としてゐました。小左衛門は一家の人々と心をあはせて家業にはげんだので、家は次第に繁昌し、室山味噌のひやうばんは世間に高くなりました。

或年、大地震があつて、其の倉がおほかたつぶれました。其の上、雨が長く降續いて、味噌・醤油は大てい腐つてしまひました。其のために、さしも繁昌してゐた伊藤の家もにはかに衰へました。世間の人は、「いくら室山の味噌屋でも、あれ程の災難にあつては、もとの身代になることはむづかしからう。」とうはさし合つてゐました。

小左衛門には三人の弟がありましたが、小左衛門は弟たちと、「今から兄弟が心をあはせ、他人の力にたよらないで、一生けんめいに家業にはげみ、三年の後には、きつともとの通りに家を繁昌させて見せよう。」とちかひ、兄弟手わけをして、日夜仕事につとめました。さうして三年たゝないうちに、前よりもりつぱな倉が出來、もと

の通りに家が繁昌するやうになりました。

其の後、横濱の港が開けた頃、小左衛門は、或日書物を讀んで、外國では茶や生絲の需要が多いことを知り、それらの品を外國に賣出して國益を增さうと思ひ立ち、製茶・製絲の業を始めました。

小左衛門は、先づ横濱へ行つて、外國人相手の商賣の樣子を調べました。さうして、人を方々にやつて茶を買集めさせ、これを横濱へ送つて外國人に賣りました。それから、野山を開いて茶の木を植ゑ、栽培のしかたに苦心し、製茶の法にも工夫をこらしたので、數年の後に

は、よい茶がたくさん出來て、外國に賣出すやうになりました。始め、其の地方の人々にも茶の木を植ゑることをすゝめましたが、誰もきゝ入れなかつたのに、小左衛門の成功を見て、我も〳〵と、製茶を始めるやうになりました。

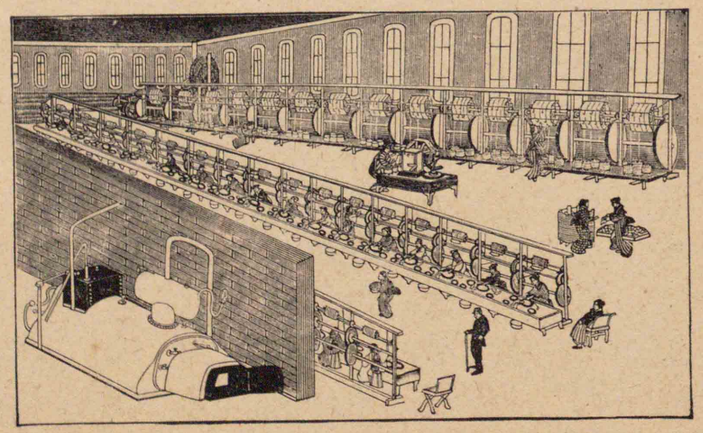
小左衛門は又桑を植ゑて蠶を飼ひ、製絲業を興しました。始はわづか二人の工女をやとひ、手ぐりで絲をとらせ、それから、次第に人數を增して仕事を大きくしました。しかし、手ぐりではどうしてもよい品が出來ないので、機械で絲をとることを思ひ立ちました。製絲

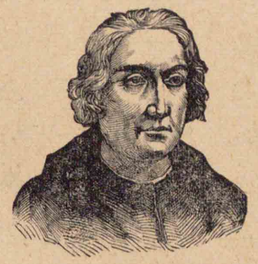
にけいけんのある人たちに聞くと、機械で絲をとるのは利益が少いといふことでしたが、小左衛門は、

「手ぐりでは、とても外國に向く絲はとれぬ。たゞ目さきの利益ばかりを考へては、品質の改良は出來るものではない。」

と言つて、機械をすゑて製絲を始めましたが、果して出來ばえがわるくて損をしました。そこで、小左衛門は上野の富岡へ行つて、製絲法を調べて歸り、機械を改め、其の數を増して仕事にはげみました。ところが、やはりよい品が出來ず、また損をしました。しかし一度や

二度の損や失敗に屈する小左衛門ではありません。さらに新しい蒸氣機械をすゑ附け、又親類の者を富岡へやつて製絲法を習はせ、一生けんめいに製法の進歩をはかりました。かやうに苦心に苦心を重ねた末、どう〳〵外國商人もほめる程のよい品が出來るやうになりました。又其のために此の地方の製絲業もだん〳〵盛になつて來ました。





第十二　自信

アメリカ發見で名高いコロンブスは、今からおよそ五百年程前、イタリヤのゼノアに生まれました。海が好きで、十四の年から船乘になりました。其の頃は、地理の學問が開けず、又さまざまの迷信があつて、まだ遠洋の航海を企てる者はありませんでした。コロンブスは、いろいろの記録や報告を深く研究して、「世界は水と陸とで出來てゐて、其の形は球のやうなも

のである。」といふ説を信じ、「ヨーロッパから西へ向かつてどこまでも進んで行けば、きつとアジヤの東部、日本か支那に達することが出來る。」と言出しました。しかし、其の頃の人は、世界は平たいものとばかり思つてゐたので、コロンブスの言ふことを誰一人として信ずる者がなく、たゞあざけり笑ふばかりでした。

コロンブスは、少しもそれに屈せず、さらに熱心に研究を續けて、いよ〳〵自分の考へてゐることにまちがひはないとかたく信じました。それからは、すつかり心が落着いて、誰の前に出ても、自分の考をはつきりと言

へるし、人のひやうばんなどで心を動かすやうなこともなくなりました。

コロンブスは、自分の考へ通りに航海してヨーロッパからアジヤに至る航路を開きたいと思ひ立ち、航海の費用を出してくれる人を探して、久しい間、ヨーロッパの各地を旅行しました。しかし、誰もコロンブスの企を助けてくれる人がなく、非常な貧苦におちいり、其の日の食物にも困るやうになりました。

しまひに、イスパニヤの皇后イサベラにお目にかゝることが出來、其の志をのべて助をこひました。皇后は

コロンブスの人物を見込み、又其の企の決して空想でないことを信じて、願ひ通りに費用を出されることとなりました。そこでコロンブスは三ざうの帆前船を仕立て、百二十人の水夫を乗込ませ、喜び勇んでイスパニヤの港を出帆しました。

それから、大西洋を西へ〳〵と進んで幾日か過ぎました。行つても行つても水また水で、陸地の影さへ見えません。水夫たちは、心配になつて來ました。やがて自分たちの船の二倍も三倍もあつたかと思はれる船の帆柱がたゞよつてゐるのを見つけました。それを

見ると、水夫たちは恐しくなつて、どてもこんな小船で行ける處ではないと言つてさわぎ出しました。しかし、コロンブスは自信に滿ちて、顏色もかへず、靜かに水夫たちをなだめました。

一度は大あらしに出あつたこともありましたが、幸ひ三ざうがはなればなれになることもなく、それからは追風になつて、船は矢のやうに走りました。或日、陸地が見えたといふ合圖の鐵砲が鳴りました。行手を見渡すと、なるほど黑い島が横たはつてゐます。喜んで船を走らせると、どこまで行つても島らしいものはなく、翌朝になつて一片の雲であつたことがわかりました。そんなことが度々あつて、水夫たちは全く失望してしまひました。さうして、すぐにイスパニヤに引返してくれなければ、コロンブスを海に投込んで、自分たちだけで歸らうとたくらみました。コロンブスは水夫たちをおどしたりすかしたりして、なほ先へ〳〵と進行を續けました。

或夜、コロンブスは、前方に當つて火の光を見たと思ひました。其の夜明に近く、先頭の船から合圖の砲聲が聞えました。果して、はるかかなたに陸地が見えて來

ました。それはイスパニヤを出帆してから、ちやうど七十一日目の朝のことでした。人々は喜び勇んで、望を達したことを祝し、皆コロンブスの先見に服し、さきにのゝしりさわいだことをわびました。

コロンブスが上陸したのは、今のサンサルバドル島

でした。コロンブスは、これをアジヤの東部にちがひないと思つて、一たんイスパニヤに歸つて皇后に報告しました。それから二度三度と航海して、三度目に始めてアメリカの新大陸を發見したのでした。

第十三　勉學

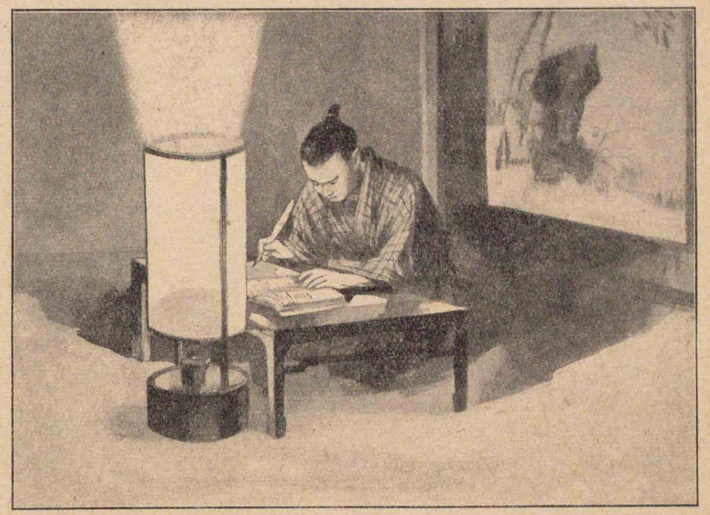
勝安芳（かつやすよし）は、若い時、西洋のよい兵書を讀みたいと思つて、しきりに探してゐましたが、其の頃、西洋の書物は少くて、容易に手に入りませんでした。或日、本屋で、ふと、オランダから新しく着いた兵書を見つけました。見れ

ばなか〳〵よい本なので、ほしくてたまりません。價を尋ねると、五十兩とのことです。安芳は其の頃大そう貧乏で、どてもそんな大金は出せません。家に歸つていろ〳〵考へた末、あちこちと親類などに相談して、十日餘りもかゝつて、やつと其の金をこしらへました。すぐにさきの本屋にかけつけますと、本はもう賣れてしまつてゐたので、がつかりしました。

安芳はどうしても其のまゝ思ひ切ることが出來ません。そこで、買つた人の名を聞いて、やつと其の家を尋ね出し、わけを話して、「ぜひあの本をおゆづり下さい。」と

たのみました。しかし持主はなか〳〵きゝ入れません。「それでは、しばらくお貸し下さい。」と言ふと、「自分もすぐ讀みたいから、貸すわけにはいきません。」とことわられました。安芳はしばらく考へて、「あなたが夜おやすみになつた間だけでもどうかお貸し下さい。」と、折入つてたのみました。持主も、「それ程に熱心におつしやるなら、お見せしませう。しかし持出されるのは困りますから、宅へ來て見て下さい。」と許してくれました。

安芳は非常に喜んで、次の晩から持主の宅で其の本を寫させてもらふことにしました。それから毎晩、遠い



道を、雨が降つても風が吹いても、約束の時刻におくれたこともなく、半年も通ひ續けて、どう〳〵其の兵書を全部寫し終りました。さうして意味のわからなかつた所を持主に問ひますと、持主は、「お恥づかしいことには、私はまだ讀終らないので、お答が出來ません。あなたはこれを寫し取られたばかりでなく、そんなくはしいことまでお調べになつたのですか。私のやうな者が此の本を持つてゐても、益のないことですから、これはあなたに差上げます」と言ひました。安芳は、「御親切に大切な本を寫させてもらつた上に、其の本をいたゞいてはすみません」とことわりましたけれども、しひてすゝめられるので、どう〳〵もらひ受けました。

安芳は、かうして學問にはげんだので、江戸で數ある兵學者の中でも、若いながらすぐれた者だとひやうばんされるまでになりました。

第十四　勇氣

安芳は幕府の命を受けて長崎へ行き、オランダ人について航海術を學びました。修業がすんでからも、引續き長崎にとゞまつて、血氣盛りの海軍練習生を教へ、九州の近海で、あちこちと航海を試みました。

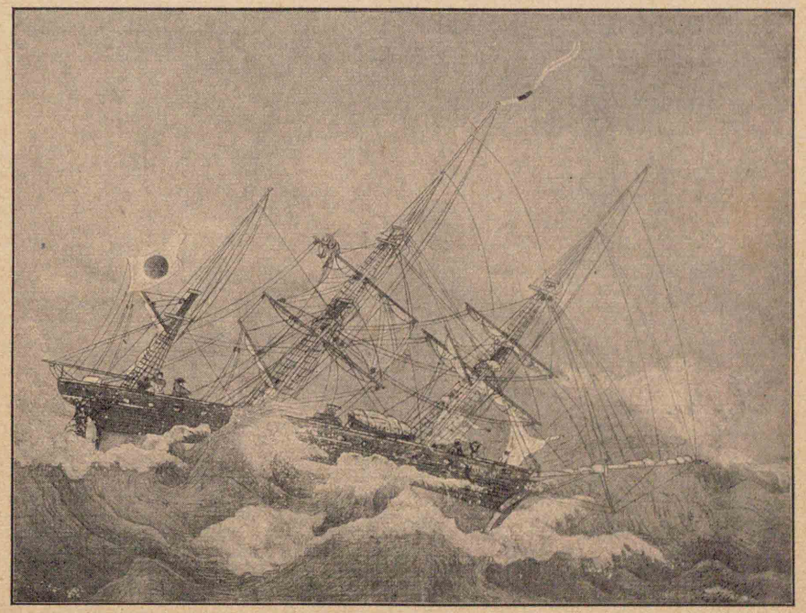
此の時、幕府は、使をアメリカ合衆國に送ることになりました。其の使はアメリカの軍艦に乘せ、別に日本の軍艦を一さうつけるといふ話でした。安芳はそれを聞いて、我が航海術の進歩を實地にためすには、此の上

もないよい折だと思つたので、日本の軍艦に乘つて、自分の教へた部下を指揮して、日本人だけの力で航海をしたいと願ひ出ました。

何分、我が軍艦を外國へやるのは始めてのことですから、まだ練習も十分に積まない日本人だけではあぶないと思つて、幕府はなか〳〵許しませんでした。しかし、安芳があくまで願つたので、幕府も遂に其の熱心と勇氣に感じて、咸臨丸といふ軍艦で、安芳等をやることにきめました。

航海中は毎日のやうに雨風が續いて、海が大そう荒れ

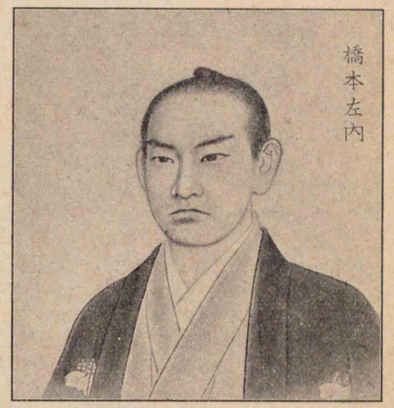
ました。大波はたえず甲板を洗ひ、あらしがはげしい時には、船體は木の葉のやうにゆれて、ねぢ折られさうになつたことも度々ありました。しかし安芳等は少しも恐れず、元氣よく航海を續け、日本を出てから三十八日目にサンフランシスコに着きました。アメリカ人は、日本人が航海術を學んでから、まだ間もないのに、少しも外國人の助を受けず、小さい軍艦でよくも太平洋を乘切つて來たものだと、大そう感心して、到る處で歡迎しました。



第十五　度量

西郷隆盛が江戸の鹿兒島藩の屋敷に住んでゐた頃、或日、友達や力士を集めて庭で相撲をとつてゐると、取次の者が來て、

「福井藩の橋本左内といふ人が見えて、ぜひお目にか


橋本左内

西郷隆盛

かりたいと申されます」。

と言ひました。一室に通し、着物を着かへてあつて見ると、左内は、二十歳餘りの、色の白い、女のやうなやさしい若者でした。隆盛は、心の中で、これではさほどの人物ではあるまいと見くびつて、餘りていねいにあしらひませんでした。左内は、自分が輕蔑されてゐることをさとりましたが、少しも

氣にかけず、

「あなたがこれまでいろ〳〵國事にお骨折りになつてゐると聞いて、したはしく思つてゐました。私もあなたの教を受けて、及ばずながら、國のために盡くしたいと思ひます。」

と言ひました。

ところが、隆盛は、こんな若者に國事を相談することは出來ないと思つて、そしらぬ顔で、

「いや、それは大變なおまちがひです。私のやうなおろかな者が國のためをはかるなどとは、思ひも寄ら

ぬことです。たゞ相撲が好きで、御覽の通り、若者どもと一しよに、毎日相撲をとつてゐるばかりです。」と言つて、相手にしませんでした。それでも、左内は落着いて、

「あなたの御精神は、よく承知してゐます。そんなにお隱しなさらずに、どうぞ打ちあけていたゞきたい。」と言つて、それから國事について自分の意見をのべました。隆盛はじつと聞いてゐましたが、左内の考がいかにもしつかりしてゐて、國のためを思ふ眞心のあふれてゐるのにすつかり感心してしまひました。

隆盛は、左内が歸つてから、友達に向かひ、

「橋本はまだ年は若いが、意見は實にりつぱなものだ。見かけが餘りやさしいので、始め相手にしなかつたのは、自分の大きな過であつた。」

と言つて、深く恥ぢました。

隆盛は、翌朝すぐに左内をたづねて行つて、

「昨日はまことに失禮しました。どうかおとがめなく、これからはお心安く願ひます。」

と言つてわびました。それから、二人は親しく交り、心をあはせて國のために盡くしました。

左内が死んだ後までも、隆盛は、

「學問も人物も、自分がとても及ばないと思つた者が二人ある。一人は先輩の藤田東湖で、一人は友達の橋本左内だ。」

と言つてほめました。

第十六　朋友

新井白石は、九歳の時から日課を立てて、少しのひまもむだにせず、一生けんめいに學業にはげみました。後、木下順庵といふ名高い學者の弟子となつて、貧苦をこらへて益〻勉強したので、日に〳〵學問が深くなりました。

順庵は、白石を見込んで、自分の昔仕へてゐた加賀の藩主に推薦することにしました。加賀は百萬石の大藩で、藩主もひやうばんの高いすぐれた人でした。

其の頃、順庵の弟子に岡島石梁といふ者がありました。其の事を聞いて、白石に向かひ、

「加賀は自分の郷里で、家には年よつた母がたゞ一人、自分の歸る日を待ちくらしてゐる。此の頃來た手紙で見ると、大そう老い衰へたやうで、心細いことばかり書いてゐる。もし先生のおとりなしで、自分が加賀の殿様に仕へることが出來たら、母もどんなに喜ぶか知れない。」

と言ひました。白石はそれを聞くと、すぐに順庵の所へ行き、其のわけを話して、

「私はどこでもよろしうございます。加賀へはどうか岡島を御推薦下さい。」

と願ひました。順庵は白石が友情に厚いのに感心して、其の通りにしました。そこで石梁は、喜んで、故郷に錦をかざることになりました。

翌年、甲斐の藩主から、順庵の一の弟子を召しかゝへたいと申し込んで來たので、白石は順庵の推薦によつて、甲斐の藩主に仕へることになりました。

第十七　信義

加藤清正は、豐臣秀吉と同じく尾張の人であります。三歳の時、父をうしなひ、母の手で育てられてゐました

が、母が秀吉の母といとこの間柄でしたから、後には秀吉の家に引取られて育てられました。

十五歳の時、一人前の武士として秀吉に仕へ、度々軍功をたてて、次第にりつぱな武將となり、後には肥後を領して秀吉の片腕となりました。

秀吉は、其の頃亂れてゐた國内をしづめ、更に明國を討つために、兵を朝鮮へ出しました。清正は、一方の大將となつて、彼の地へ渡りました。清正の親しい友達に、淺野長政といふ人がありましたが、其の子の幸長も、朝鮮に渡つて勇ましく戰つてゐました。ところが、或時、

幸長が蔚山の城を守つてゐた所へ、明國の大兵が攻寄せて來ました。城中には兵が少い上に、敵がはげしく攻立てるので、城はたちまち危くなりました。そこで、幸長は、使を清正の所へやつてすくひを求めました。清正の手もとには、敵の大兵に當る程の兵力がありませんでした。けれども、清正は、其の知らせを聞くと、

「自分が本國をたつ時、幸長の父長政が、くれ〴〵も幸長の事を自分に賴み、自分もまた其の賴みを引受けた。今もし幸長を早くすくはなかつたら、自分は長政に對して面目が立たない。」

と言つて、身の危險をかへりみず、部下の五百騎を引連れて、すぐに船で出發しました。味方の船は、僅かに二十さうばかり、清正は、銀の長帽子のかぶとをつけ、長槍をひつさげ、船のへさきに突立つて部下を指揮し、手向かつて來る數百さうの敵船を追散らし圍を破つて蔚山の城にはいりました。それから、幸長

とこゝに立てこもり、力を合はせて、明國の大兵を引受け、さん〳〵にこれをなやましました。其のうちに、ひやうらうが盡き、飲水もなくなつて、非常に難儀をしましたが、どう〳〵敵を打破りました。

格言　義ヲ見テ爲ザルハ勇ナキナリ。

第十八　誠實

清正は、嘗て石田三成等のざんげんで秀吉の怒を受けて、伏見の屋敷に謹慎してゐたことがありました。其の時、或夜大地震があつて、たくさんの家が倒れました。

清正は、秀吉の身の上を氣づかつて、二百人ばかりの部下を引連れて、眞先に伏見の城にかけつけ、夜が明けるまで城門を守つてゐました。　秀吉がはるかに清正を見ますと、清正は、此の年月遠く外國に出て戰つたため、日にやけて色も黑く、やせ衰へてゐました。　其の難儀を重ねた樣子がいかにも氣の毒でしたので、秀吉も思はず涙を流して清正の遠征の苦勞を思ひやりました。さうして、今夜の清正の行に感心して、怒もおのづからとけました。　そこで、あくる日、清正を呼出して、ざんげんのことを自らきゝたゞしたが、清正に罪のないことが明らかになつたので、かへつて褒美を與へてほめました。

秀吉がなくなつた後、其の子の秀頼は、まだ幼くて、大阪城にゐました。　其の頃、德川家康の勢が大そう盛になり、豐臣氏の恩を受けた者も、次第に家康について、秀頼をかへりみる者が少くなりました。　しかし、清正は相變らず秀頼のために心を盡くし、大阪を通る度に、きつと秀頼の安否を尋ねました。　家康は、それをきらつて、そつと人に言ひふくめて、やめさせようとしました。

清正は、

「大阪を通りながら、秀頼公の御きげんを伺はないのは、武士たる者の道でない。又太閤の御恩を忘れては相すまない。」

と言つて、きゝませんでした。

或時、秀頼は、家康から、京都で對面したいと申し込まれました。秀頼の母は、家康に敵意のあることを疑つて、秀頼が京都に行くことに同意しませんでした。けれども、清正は、もし秀頼が此の對面をことわつたなら、豐臣氏と徳川氏との仲が惡くなるであらうと心配して、

「私が命にかけておまもり致しますから、ぜひお出で

を願ひます。」

と言つてすゝめました。そこで、秀頼は、清正と一しよに京都へ行くことになりました。

清正は、途中、徒歩で秀頼の乘物の側につきそつて、京都の家康の所へ行きました。家康は、自らげんくわんまで秀頼を出迎へて奥の間に通し、互にあいさつをかはし、それから御ちそうをしました。清正もおしやうばんをしましたが、よい頃をはかつて、

「さぞ、大阪では、お待ちかねのことでございませう。さあ、お立ちなさいませ。」

と申しましたので、家康も、

「御もつとも。さてもさても、御成人でおめでたい。」

と言つて、みやげをおくり、げんくわんまで見送りました。清正は、二人の對面の間は、少しもゆだんなく秀頼の側に居り、歸りにも秀頼の身をまもつて、無事に大阪に歸り着きました。其の時、清正は、萬一の用意にと、かねてふところに入れてゐた短刀を取出し、

「今日、いさゝか太閤の御恩に報いることが出來た。」

と言つて、涙を流しました。

第十九　謝恩

豐臣秀吉の夫人は高臺院といつて、夫によく事へて、内助の功の多かつた人であります。夫人はもと織田信長の足輕杉原助左衛門といふ者の娘でした。生まれた時から、同じ信長の家來の伊藤右近といふ人に世話になり、親切に養育されました。大きくなると、よい家に奉公に出してもらひ、行儀などを見習ひました。

其の頃秀吉は、木下藤吉郎といつてまだ低い身分でしたが、夫人を妻にもらはうと思つて、其のことを申し入れました。　夫人は先づ右近の所へ行つて相談すると、右近は「藤吉郎はちゑのすぐれた人だから、末のためによろしからう。」と言つて嫁入させました。　其の時、右近は、貧しい中から、夫人に、夜着・ふとんや、鏡くしかうがいなど、いろ〳〵の支度をとゝのへて與へました。

其の後、藤吉郎は、次第に立身出世し、どう〳〵太閤秀吉といつて、日本國中の人から敬はれる身になりました。

太閤夫人となつた高臺院は、昔世話になつた右近夫婦

のことを忘れず、方々をさがさせてやつと尋ね出しました。　其の頃、右近は落ちぶれて、名をかくしてゐなかにかくれてゐました。　秀吉夫婦は、それを大阪城に招いてねんごろにいたはり、昔のことなどを語り出し、涙を流して禮をのべ、夫人自らけつこうな物をたくさん取出して與

へました。

此の時、夫人は、右近等の側に寄つて、

「御身たちの綿入はよごれてゐます。昔のお禮に、私に洗濯させて下さい。」

と言つて、新しい着物に着かへさせました。それから十日ばかりたつと、また二人を城に招いて、先日の洗濯が出來上つたからと言つて、夫人が手づから仕立てかへてきれいにした綿入を渡しました。秀吉は、右近に祿を與へて、其の後は、大阪に住まはせることにしました。

第二十　博愛

ナイチンゲールは、イギリスの大地主の娘でした。小さい時から、情深い人で、常に貧しい家を見まつて、不幸な人をやさしくなぐさめてゐました。又、生き物をあはれみ、犬猫などが病氣をしたり、けがをしたりしたのを見ると、藥を與へ

てかいはうしてやりました。

ナイチンゲールは、大きくなつてから、毎年ロンドンへ行つて市中の病院をたづね、氣の毒な人たちの樣子を見まつてゐましたが、二十五歳の時、ドイツ・フランス・イタリヤの諸國を旅行して、行く先々で病院や盲啞院などを視察しました。二十八歳の時、再びドイツへ行つて看護婦學校にはいり、約六箇月で卒業して歸りました。

ナイチンゲールは、それからロンドンで貧しい人たちをすくふ病院の世話を引受け、自らたくさんの金を出

して、不幸な人々を助けることに骨折りました。

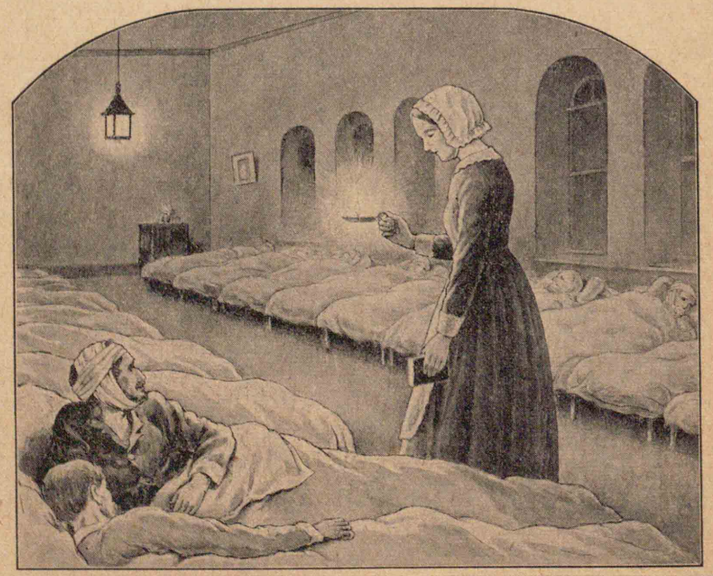
ナイチンゲールが三十四歳の時、クリミヤ戰役といふ戰爭が起りました。これは、イギリスとフランスが一しよになつて、トルコを助けて兵をクリミヤ半島に進め、ロシヤと戰つた戰爭です。戰がはげしかつた上に、コレラ・赤痢などがはやつたので、負傷兵や病兵がたくさんに出來ましたが、遠く本國とへだたつた戰地のことを、醫師も看護をする人も少いために、軍隊は大そう難儀をしました。情深いナイチンゲールは、それを聞くと氣の毒でたまらず、傷病兵を看護して國のため

に盡くすのは此の時であると思つて、陸軍大臣の許可を得、三十餘人の看護婦を引連れて、はる〴〵戰地へ向かひました。

戰地に着くと、直ちに野戰病院に入り、看護婦たちをさしづして、傷病兵の看護に當りました。重い病人も、ナイチンゲールが病床に來てなぐさめる時には、嬉しさの餘り、聲を立てて泣きました。夜、醫師の退いた後にも、ナイチンゲールは、小さい燈火を持つて、一々傷病者を見まつてなぐさめました。ナイチンゲールは、かやうに一生けんめい看護をしてゐるうちに、餘り働き過

ぎたためか、自分も病氣になりました。醫師たちは心配して、皆、國に歸ることをすゝめましたが、きゝ入れないで、病氣がなほると、また力を盡くして傷病兵の看護につとめました。

戰爭がすんでイギリスへ歸つた時、ナイチンゲールは、女帝にはいえつを許されて厚くおほめにあづかり、



又イギリス國民は、たくさんの金をおくつて其のてがらをほめました。しかし、ナイチンゲールは、其の金を皆看護婦學校をたてる基本金に寄附して、少しもてがらをじまんするやうなことはありませんでした。

博く人々を愛するのは、我等の守るべき道であります。災難にあつた不幸の人をあはれむのはもちろん、たとひ敵國の人でも、傷を受けたり、病にかゝつたりして死ぬやうな苦しみをしてゐる者を助けるのは、博愛の道にかなふものであります。

日本人は、昔から、博愛の心の深い國民であります。明

治三十七八年戰役の時、我が國の將士が博愛の道に盡くした美談は、我が軍の武勇のほまれと共に、世界にとどろいてゐます。中にも深く人々を感動させたのは、明治三十七年八月十四日の海戰の時の、我が上村艦隊のりつぱな行であります。其の日、上村艦隊は、朝鮮の蔚山沖で敵ロシヤのウラヂボストツク艦隊が南をさして進んで來るのを見つけて、こゝに大激戰を開き、敵艦一さうを打沈め、他の二さうに大損害を與へました。敵艦の沈沒する時、我が艦隊は、すぐ其の所へ行つて、おぼれかゝつてゐる敵を六百餘人もすくひ上げました。

第二十一　皇太后陛下

皇太后陛下は、御幼少の頃から御しつそにあらせられ、御服裝などもぜいたくなものは決してお用ひにならず、學校へは、大ていお徒歩でお通ひになりました。又大そうお情深くあらせられて、人々をおいつくしみになりました。

皇后におなりあそばしてからは、我が國の産業に御心をお用ひになつて、宮中で御親ら蠶をお飼ひになり、博覽會や共進會などにも、度々行啓になりました。又諸

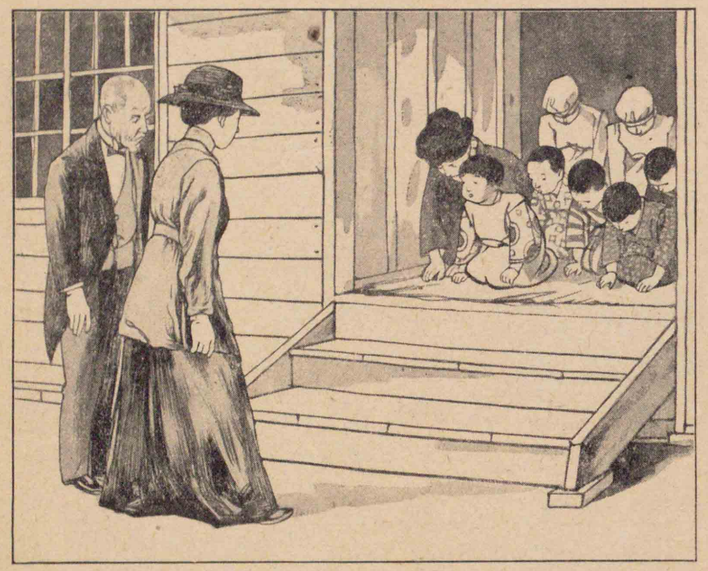
種の學校に行啓あらせられて、教育が進歩するやうにおはげましになりました。

陛下は、博愛・慈善の事業に深く御心をお用ひになつて、日本赤十字社總會には毎回行啓あらせられ、赤十字社の事業が發達するやうにお望みになりました。

大正十二年九月、關東地方に大地震があつた時、陛下は日光の御用邸に御滯在中でありましたが、罹災者の身の上を大そう御心配あそばして、間もなく東京に還啓あらせられ、三日にわたつて、市内の病院や救護所などを御見まひになりました。還啓の日には、上野驛にお

着きになると、宮城へはお歸りにならず、すぐ上野公園に成らせられて、市中の燒けあとを御覽になり、それから東京市の救療所にお立寄りになりました。陛下は、假の病室のことで、雨の日などは寒くはあるまいかと御心配になり、又、寢臺が餘りに粗末なので、體が痛くはないであらうかと御同情あそばされました。又一人の手が折れた年よりをおいたはりになつて、大切にするやうにと仰せられなどしました。

翌日は、日本赤十字社病院に行啓あらせられましたが、赤んぼうの泣いてゐるのを御覽になつて、牛乳の吸口



を御親ら其の口にふくませておやりになりました。

又還啓の時、地震で親をなくした子供たちがげんくわんの前で、お見送り申し上げてゐるのに御目をとめさせられて、おそれ多くも其の側までお出でになつておいたはりになりました。

其の年も暮に近づき、寒さ

も次第に加つて來ましたので、陛下はたくさんの綿入をお作らせになつて、病院にはいつてゐる罹災者にたまはりました。

御歌

おほとのをたゝくあられの音にしも
かりやのよるの寒さをぞおもふ

第二十二　忠君愛國

吉田松陰は長門の人であります。小さい時から、父母や叔父の教をよく守つて學問にはげみましたので、學

業が大そう進みました。十一歳の時に、藩主の前に呼出されて、兵書の講釋をいひつけられましたが、大ぜいの家來のならんでゐるところで、見事に講釋をしたので、藩主を始め皆大そう感心しました。

松陰は、少年の頃、父から、我が國がりつぱな國であることを教へられ、又先輩に外國の事情を聞いて、國のために盡くさうと志を立てました。それから、各地を旅行して、すぐれた人にあつて教をこひ、又内外の事情を知

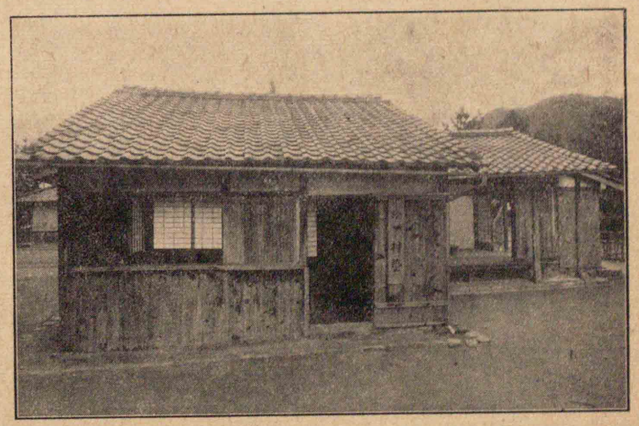
ることにつとめました。

其の頃アメリカ合衆國の軍艦が我が國に來て、交際を求め、通商をせまりました。しかし、我が國は、久しい間、外國と交際をしなかつたので、どうしたらよいかと國中大さわぎをしました。松陰は、此の國難をすくつて國のために盡くさうと苦心しましたが、自分一人の力では出來ないことを知り、藩主にいろ〳〵と意見書を出しました。其の一つを時の天皇が御覽になつたと聞いて、松陰は感泣しました。

松陰は、「我が國は萬世一系の天皇のお治めになる國で

あつて、我等は祖先以來、天皇の臣民である。天皇は皇祖皇宗の大御心のまゝに臣民をいつくしませ給ひ、臣民は祖先の志をついで天皇に忠義を盡くして來た。天皇と臣民とは一體をなし、忠と孝とが一致してゐる。これが我が國の萬國にすぐれたところである。誰でも日本人と生まれた者は、我が國體がかやうに尊いことをわきまへるのが、最も大切なことである。」と信じ、先づ自分の鄉里から始めて、全國の人に此の事を知らせて、忠君愛國の精神を振るひ起させようと決心しました。

二十八歳の時、郷里の松本村に松下村塾を開いて、眞心をこめて弟子たちを教へました。　或時は、十歳ばかりの幼い弟子が新年におけいこに來たのを喜び、親切に教へてやつてはげましました。　又霜の深い夜、爐をとり圍んで、弟子たちと國事を語り明かしたこともありました。　毎日ひるのおけいこがすむと、松陰は、弟子たちと一しよに、畠を耕したり、米をついたりしま



した。

後には、塾に來る者が次第にふえて、八疊の一室では狹くなりましたから、皆相談して一室建增さうといふことになり、先生も弟子も力を合はせ、柱を立て、壁をぬつて、十疊半の一室を作り上げました。

かやうにして松陰は、弟子たちと寢起きや食事を共にして、書物を讀み、意見をたゝかはせ、熱心に教へ導きました。　さうして、「松本村は、片ゐなかではあるが、此の塾からきつと御國の柱となるやうな忠義な人が出る。」と言つて弟子たちをはげましました。

松陰は、三十歳でなくなりましたが、國體を明らかにし、皇室を尊び、我が國を盛にしようとした其の精神は、弟子たちにうけつがれ、果して其の中から、りつぱな人物が出て、御國のために盡くしました。

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも
留め置かまし大和魂

第二十三　兄弟

松陰には、一人の兄と四人の妹と一人の弟とがありました。みんな仲よくして助け合ひました。

松陰の兄を梅太郎といひ、すぐの妹を千代といひました。此の三人は兄弟中でも年のちがひも少く、家がまだ貧しい時に一しよに育ちましたので、助け合ふことも多うございました。松陰は、兄と共に父や叔父の教を受け、二人で互にはげまし合ひながらよく勉強しました。松陰は、大きくなつて、國のために盡くす大志を抱き、全國を旅行したり、江戸にとゞまつてゐたりして、家に歸ることは少かつたが、兄の梅太郎は、よく父母に事へて、故郷のたよりを、常に弟の松陰に知らせてやりました。又松陰のために書物をとゝのへて送り、松陰

の苦勞をなぐさめて其の志をはげましました。松陰は、外に出てゐても常に我が家のことを忘れず、父母の側にゐて事へることの出來ないのを殘念に思ひ、兄や妹に、自分に代つて父母に事へてくれるやうに賴みました。或年の正月、松陰は兄に手紙を送つて、

朝日さす軒端の雪も消えにけり、
わが故郷の梅やさくらん

といふ歌をよみ、新年のおよろこびをのべ、けさはおざふにをたくさんいたゞいて、少年の頃、一しよに樂しいお正月を迎へたことを思ひ出したと言つて、喜びました。

た。

松陰は妹たちをかはいがりました。妹の小さい頃には、書物を教へたり、字を習はせたりしました。大きくなつて他家へ嫁入してからも、手紙をやつて、家をとゝのへ子供を教へる道をこまゞと書いて與へました。其の中に、

「およそ人の子の、かしこきもおろかなるも、よきもあしきも、大てい父母のをしへによる事なり。」

と記して、殊に子供の幼い間は、母の教が大切であると誡めました。又、

「神明をあがめ尊ぶべし。大日本と申す國は、神國と申し奉りて、神々様の開きたまへる御國なり。」

と記して、神を敬ふべきことを教へました。

妹は、これらの教を長く忘れず、松陰がなくなつた後も、其の手紙を出して見ては、兄の親切を思ひ出して泣いたといふことです。

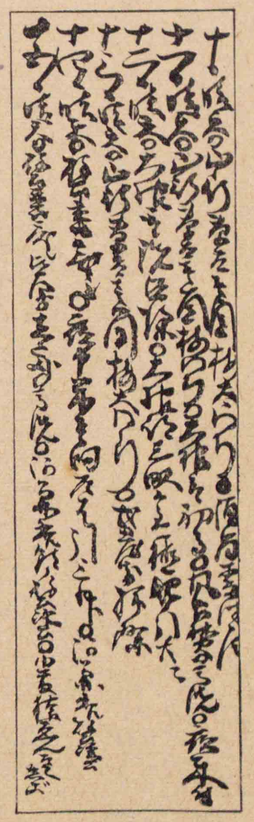
第二十四　父母

松陰が妹に與へた手紙に、「自分たちの家には、りつぱな家風がある。神様を敬ふこと、祖先を尊ぶこと、親類と

むつまじくすること、學問を好むこと、又田畑を自分で作ることなどである。これらのことは、父母の常になされるところであつて、自分たちはそれにならはなければならぬ。これが孝行と申すものである。」と教へてあります。

松陰の父は、杉百合之助といひました。松陰が少年の頃までは、家禄ばかりでは、くらしを立てることが出來ないので、農業につとめました。しかし、讀書が好きで、米をつくときにも書物を讀み、又畠に出ても、あぜの草の上に書物を置いて、仕事の休の折に讀みました。松

杉百合之助日記　天保十三年十一月ノ所



陰兄弟が大きくなつてからは、かやうな時にも兄弟に書物を讀んできかせました。米つき場のあたりや田畑のあぜで、親子の讀書の聲が聞えると、松陰の叔父は、「やあ、またにいさんのが始つた。」と言ひました。

百合之助は、常々松陰たちに、「むだ話をするひまがあるなら、書物を讀め。」と言つて誡めました。

百合之助は、毎朝、早く起きて必ず自分で井戸から新し

尋修五

い水をくみ、祖先の靈前に供へて拜みました。祖先の忌日には、殊につゝしんで祭り、敬ひの心をあらはしました。又氏神様へ參るにも、身體を清め、衣服をあらためました。

松陰の母は、瀧子といひました。二十歳の時、百合之助に嫁し、よく夫を助けて野に出て田畑を耕したり、山へ行つて薪をとつたりして、仕事に骨折りました。

又よく姑に事へ、我が子の養育につとめ、裁縫・洗濯のことから家事一切をひとりで引受けて、かひ〴〵しく立働き、馬を飼ふ世話まで自分でしました。

瀧子は、姑によく事へました。三度の食事には温い物をすゝめ、衣服は柔かい物を着せていたはり、裁縫する時などは、姑の側で、喜ばれるやうな話をしてきかせてなぐさめました。又姑の妹が此の家に世話になつてゐたが、或時、重い病氣にかゝりました。瀧子は久しい間、夜もろく〳〵寢ずに介抱したので、姑は、忙しくてひまがないのに、親類の世話まで親切にしてくれて、まこ

とにありがたい。」と言つて、涙を流して喜びました。

後、百合之助は、藩の役人に取立てられて、役宅にうつりましたが、瀧子はとゞまつて、よく家をとゝのへ、松陰たちの養育につとめました。

松陰の父母は、かやうに心をあはせて、父は業務にはげみ、母は夫を助けて家をとゝのへ、又共に我が子の教育に力を用ひましたので、家も榮えるやうになり、子供は皆心掛のよい人になりました。中にも松陰は、國のために盡くし、度々難儀に出あひましたが、いつも父母は、我が子をはげましたり、いたはつたりして、よく尊王愛

國の道に盡くさせました。　松陰が松下村塾を開いてゐた間も、父は、公務のかたはら何くれと松陰の相談相手となつて助け、母は、弟子たちを我が子のやうにいつくしみ、又松陰をたづねて來る人々を親切にもてなしました。

第二十五　孝行

昔、京都に近い川島村に、儀兵衛といふ人がありました。生まれたのは京都でしたが、生まれるとすぐ、此の村の貧しい家にもらはれて來ました。　十歳の時、養父に死

別れ、それから三十九年の間、病身な養母に事へて孝行を盡くしました。

家には少しの田地もないので、儀兵衛は、人にやとはれて農業の手傳などをして、やつとくらしを立てました。毎朝早く起き、母の食物やつかひ水などをそれ〴〵用意し、冬は手洗の湯をわかし、こたつや火鉢に火をいけておいて、仕事に出て行きました。　其の日の仕事がすむと、急いで歸つて來て母に安心させました。　母は、手足がいたんで不自由でしたから、髪をゆひ、着物を着せ、又毎夜湯をつかはせ、いたみがはげしい時は、夜がふけ

るまでなでさすつていたはりました。

儀兵衛は、貧しい中にも、母には着物や食物に不自由をさせないやうに心掛けました。母も、貧になれて、大して望もありませんでしたが、何でもたべたいといふ物があれば、儀兵衛はすぐにとゝのへてすゝめ、母のこゝろよくたべるのを見て喜びました。又よそで魚や菓子などをもらふと、自分はたべないで、持つて歸つて母にすゝめました。又母に心配をかけないやうに注意し、母の喜ぶことは、骨身（ほねみ）ををしまず致しました。

人にやとはれて京都や伏見などに行き、用事がひまど

つて歸りがおそくなることもありました。そんな時には、母は待ちかねて、歩行も不自由なのに、杖をついて途中まで迎へに出て待つてゐました。やがて急いで歸つて來る儀兵衛の顔を見ると、母は大そう喜んで涙を流し、儀兵衛も母の迎をありがたがつて涙をこぼし、二人とも、も

のも言へないで立つてゐました。しばらくして、儀兵衛は買つて來たみやげを母に渡し、手を引いて家に歸つて行きました。近所の人は此の樣子を見て、感心しない者はありませんでした。

時の天皇は、儀兵衛の孝行のことを聞し召され、儀兵衛に御褒美をたまはりました。

第二十六　徳行

中江藤樹は、近江の小川村に生まれました。小さい時から心だてが正しく、近所の子供と遊んでも、惡い行を

見習ふやうなことはありませんでした。祖父は、米子藩主に仕へてゐましたが、藤樹が九歲の時、米子に連れて行つてそだてました。藤樹は、祖父のいひつけで字を習ひましたが、よく勉強するので、早く上手になり、間もなく祖父に代つて手紙を書くことが出來るやうになりました。

十歲の時、米子藩主は伊豫の大洲に移ることとなりましたから、藤樹も祖父に連れられて大洲に行きました。

十一歲の時、或日、經書を讀んで、人は誰でも身を修めるのが本であると書いてあるのを見て、聖人といはれる

程の徳の高い人にでも、學んでなれないことはないとさとつて、それからは身を修めることにつとめました。

十四五歳の頃、祖父母は相ついで死にましたから、藤樹は、祖父の家をついで大洲藩主に仕へました。十八歳の時、故郷の父が死んで母一人になりましたので、役をやめて、小川村に歸りました。

藤樹が小川村に歸つて後は、貧しい中で、年よつた母に

事へて孝行を盡くし、又熱心に學問にはげんだので大そう徳の高い學者となりました。そこで、藤樹をしたつて、遠い所からはる〴〵教を受けに來る者も多く、小川村を始め近くの村々の人は、みんな其の徳に感化されました。それで、世間の人は、藤樹を敬つて近江聖人といひました。ひきやくの忘れた金を返したあの正直な馬方も、藤樹の感化を受けた人であります。

藤樹は四十一歳でなくなりました。藤樹がなくなつて後も、其の感化がしみ込んで、村の若い者は夜集つて手習をし、互に行をつゝしんだので、村がよい風俗にな

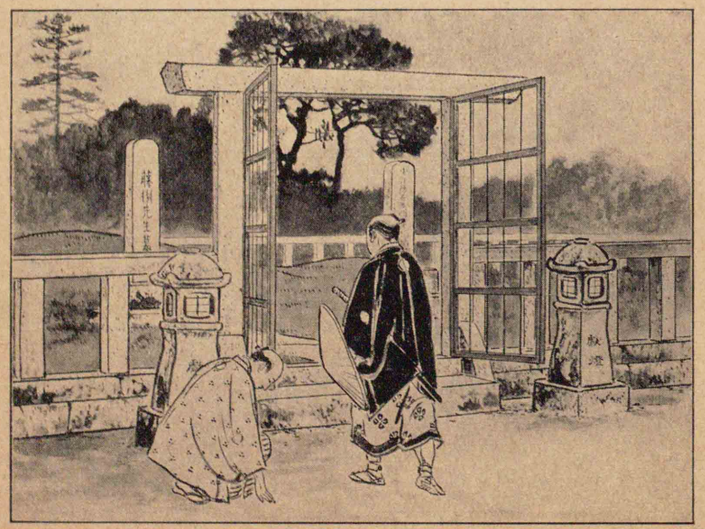
りました。それから長い歳月がたつてゐますが、村の人たちは、今でも藤樹の德をしたつて、年々の祭をしてゐます。

或年、一人の武士が小川村の近くを通るついでに、藤樹の墓をたづねようと思つて、畑を耕してゐる農夫に道をきゝました。農夫は、

「旅のお方にはわかりにくいでせうから、御案内致します。」

と言つて先に立つて行きましたが、途中で自分の家に立寄つて着物を着かへ、羽織まで着て來ました。武士

は心の中で、自分を敬つて、こんなにていねいにしてくれるのだらうと思つてゐました。藤樹の墓に着いた時、農夫は垣の戸をあけて、武士を其の中にはいらせ、自分は戸の外にひざまづいてうやうやしく拜みました。武士は、其の樣子を見て驚き、さきに農夫が着物を着かへて來たのは、全く藤樹を敬ふため



であつたと氣がついて、農夫に、

『藤樹先生の家來ででもあつたのか。」

ときゝますと、農夫は、

「いえ、さうではありませんが、此の村には、一人として先生の御恩を受けない者はございません。私の父母も『自分たちが人間の道をわきまへ知つたのは、全く先生のおかげであるから、決して先生の御恩を忘れてはならない。』と、常々私に申しきかせて居りました。」

と答へました。此の武士は、始はたゞ藤樹の墓を見て

行かうといふ程に考へてゐたのでしたが、此の農夫の話を聞いてから深く感心して、ていねいに墓を拜んで行きました。

第二十七　よい日本人

我が大日本帝國は、萬世一系の天皇のお治めになる國であります。御代々の天皇は、臣民を子のやうにおいつくしみになり、臣民は、祖先以來、心をあはせて天皇を御親とあふぎ奉り、よく忠孝の道に盡くしました。これが我が國の世界に類のないところであります。我

等は、常に天皇陛下・皇后陛下・皇太后陛下の御高徳をあふぎ奉り、祖先の志をついで忠君愛國の道にはげまなければなりません。　忠君愛國の道は、我が國體をわきまへて、君國の大事に臨んでは、擧國一致、奉公の誠を盡くし、平時にあつては、常に大御心を奉じて各自分の業務にはげんで、國運の隆昌をはかることであります。

我等は、常に國法を重んじなければなりません。　國の重い法令から市町村の規則に至るまで、よくそれを守るのは、天皇陛下の大御心にしたがひ、國を愛する道であります。

公衆に對して、禮儀・公德を守り、衛生に注意し、進んで公益を廣めて人々の幸福をはかり、世の中をよくするのは、我等の盡くすべき務であります。

我が國運は、最近いちじるしく進歩して來ました。　我等は益身體を健康にして學問に勉め、勤勞を愛し、儉約を守り、產業を興して、更に國力の充實をはかることが大切であります。　さうして、何事をするにも、自信を持ち、勇氣を振るひ、進取の氣象をもつて當ることが必要であります。

人に對しては、信義を重んじ、度量を大きくし、朋友には

交を厚くしなければなりません。人から受けた恩を忘れず、又博く人を愛し、誰にも親切にするのは、我等の務であります。

家にあつては、父母は、日夜心を勞して、業務に勵み、我が子を教養して、家の繁榮をはかり、國のために盡くしてゐます。子たる者は、よく父母の教を守り、孝行を盡くし、兄弟仲よくして互に助け合ひ、父母の心を安んじなければなりません。

我等は常に誠實を旨としなければなりません。何事をするにも、心に誠實があれば、行もおのづから正しく、

徳行も身に備つて來ます。

これらの心得を守るのは、教育に關する勅語の御趣意にかなふわけであります。我等は此の御趣意を深く心にとめ、眞心をもつてこれらの心得を實行し、あつぱれよい日本人とならなければなりません。

終

昭和十三年三月五日印刷
昭和十三年三月七日發行
昭和十三年三月七日翻刻印刷
昭和十三年三月廿五日翻刻發行

尋常小學修身書卷五兒童用
定價金拾四錢

昭和十三年三月八日
文部省檢査濟

著作權所有

著作兼發行者　文部省

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
翻刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　石川正作

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
印刷所　東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地
發行所　東京書籍株式會社

37593
M
広島大学図書
2500028387